

企業名：富士薬品工業株式会社

レポート名：2022 年度 Corporate Report

### 1. この会社が目指す姿が理解できるか

この統合報告書からは、富士薬品工業株式会社（以下、富士薬品とする）の目指す姿が大いに理解できた。それは一言にまとめると、富士薬品が社会全体の幸福に寄与するということである。詳しく書くと、富士薬品が女性向けの医薬品をメインにしていることもあり、世界の女性の well-being の向上を目指していることが随所で見られた。今後より一層、世界中で女性の社会進出が進む中において、しっかりとその役割を果たしていくという目標を感じ取れた。また従業員が仕事を通じて喜びを感じ、幸せな社会を作っていくことを大きな目標にしていることがよく分かった。

### 2. この会社の競争優位性が理解できるか

この統合報告書からは富士薬品の持つ競争優位性がある程度理解できた。富士薬品の優位性となるのが、国内トップシェアを誇る造影剤部門と経口避妊剤や不妊症治療剤などの女性用医薬品部門の大きく二つとなるであろう。まず造影剤部門においては成長性が高いはないが、国内トップシェアという強みがある。今後も富士薬品の中核を担う部門となるであろうことが分かった。次に女性用医薬品部門においては、経口避妊剤、不妊症治療剤などで存在感を放っている。また月経困難症治療剤では 2013 年に新薬を登場させるなど、この部門では十分に優位性があると言えるだろう。一方でバイオシミラーなどの事業は、規模が小さく現在では優位性があるとは理解できなかった。

### 3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

この統合報告書を鑑みるに、富士薬品の優位性は持続的、あるいは優位性がさらに拡大していくのではないかと感じた。まず先述した造影剤部門は業界トップシェアであり今後も持続的であると感じた。次に女性用医薬品に関しては、企業優位性はさらに拡大してくと感じた。理由としては、世界的な女性の社会進出の流れがあり、また富士薬品の持つ薬品に関しての需要は国内外で拡大していきだろろうと思われたからである。昨今の日本では不妊治療が海外に比べ遅れながらも、適用となった。これによって、日本では不妊治療薬の需要はますます拡大していくと思われ、富士薬品の強みとしているこの部門において、成長の持続性があることが理解できた。またその他の製剤においても、海外企業と協力して月経困難症治療剤の新薬を開発するなど、今後の女性の社会進出が進む世界において、よりグローバルな視点で優位性が持続するだろうと感じた。さらに、バイオシミラー事業などのジェネリック医薬品も工場を増やす「sugar プロジェクト」の進展とともに進んでいき、持続的な成長性が見込めるということが分かった。

#### 4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

私はこの統合報告書を読んで、富士薬品の中で自身の人的資本の向上を達成できると思った。富士薬品は人事評価の一環として徳目評価を取り入れている。ここでの徳とは、「自己の最善を他者に尽くしきる」ということである。つまり富士薬品においての徳ある人とは、社会に最大限貢献して、自分の成長も達成できる人を指すのだと理解した。「論語と算盤」を管理職以上の課題図書とするなど、社員教育にも力を入れている。何事も社会貢献のためであるという姿勢を会社で身をもって理解できる会社であると感じ、ここでは人的資本の価値向上は絶対と言っていいほど達成されるのではないかと感じた。

#### 5. 報告書にはどのような改善余地があるか

この統合報告書は総じて良いものであると感じたが、何点か引っかかったことがある。まず一点目として製薬企業として仕方がない点はあるというのは理解するが、聞いたこともないような単語が幾つも出てきて理解しづらいという点だ（例えばバイオシミラーなど）。専門的知識がない一般人や投資家などが理解しやすいように注釈などで簡単な説明があれば良いと感じた。次に二点目として、財務情報に関する記載が薄かったように思われた。2029年度までの目標など、やや希望的観測で書きすぎなのではないかと感じるころもあった。財務に関しては良いことばかりが書いてあったが、しっかりと欠点となりうるような事柄についても記載すべきなのではないかと感じた。三点目として、二点目とやや似ているが、文章中に「持続的な」などの所謂SDGs関係の文言が多々出てきたが、あまりにこういった文言を用いると上辺だけのもののように感じられた。例えば徳目評価や人材の強みといった、会社のより内面的な財産のような部分にもっと焦点が当たっていると尚良かったのではないかと感じた。